

真庭市埋蔵文化財調査報告 3

高 田 城
田 楽 城

地上デジタルテレビ放送施設建設工事
に伴う発掘調査

2010

真 庭 市 教 育 委 員 会

序

21世紀に入り急速に進む情報化社会は、私たちの生活のあらゆる局面で様々な変化をもたらしつつあります。そのうちのひとつとして、わが国のテレビ放送開始より続いてきた地上アナログ放送は平成23年7月をもって終了し、地上デジタル放送に全面移行します。これに向け、全国各地でデジタル放送中継局の設置が進められており、真庭市内においても、勝山地域と落合地域の2ヶ所で中継局が建設されることになりました。

建設地は勝山地域については美作西部有数の中・近世山城である高田城に、落合地域については中世山城である田楽城にそれぞれ相当するため、現状保存について事業者側と協議を重ねましたが、やむを得ず工事によって影響を受ける範囲について記録保存のための発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査の結果、高田城出丸については建物跡等の遺構を検出するとともに、若干の遺物が出土しました。また、田楽城では明確な遺構・遺物ともにみられませんでした。詳細な地形測量を行ったことから城郭構造の解明に寄与することになりました。こうした調査成果を収めた本書が、当地域の歴史研究や埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるうえで、広く活用されることを願う次第です。

最後になりましたが、調査および本書の作成に際しましては、関係者ならびに地元地域の皆様から多大なご支援とご協力をいただきました。末筆ではありますがここに記して厚くお礼申し上げます。

平成22年1月

真庭市教育委員会

教育長 大倉 貢

例 言

- 1 本書は、地上デジタルテレビ放送施設の建設事業に伴い、日本放送協会・山陽放送株式会社・岡山放送株式会社・西日本放送株式会社・株式会社瀬戸内海放送からの依頼を受け真庭市教育委員会が発掘調査を実施した、高田城（真庭市勝山）および田楽城（真庭市中河内）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、平成20年度（1～3月）に坂田 崇が担当して実施した。調査面積は高田城が127.3㎡、田楽城が69.2㎡である。
- 3 本書の執筆・編集は坂田が行った。
- 4 調査にあたって、高田城の現地に於いては森上知洋氏（真庭市文化財保護審議会委員）より、田楽城の調査に際しては妹尾久義氏（地元郷土史研究家）よりご教示をいただいた。また、高田城の出土遺物に関しては乗岡 実氏（岡山市教育委員会文化財課）よりご教示をいただいた。ここに記して感謝の意を表する次第である。
- 5 両遺跡の地形測量、高田城の遺構実測および空撮についてはフジテクノ有限会社の業務支援により実施した。
- 6 出土遺物・図面・写真等は、真庭市教育委員会（真庭市落合垂水1901-5）にて保管している。

凡 例

- 1 本書で用いた高度は海拔高であり、方位は真北である。
- 2 第2図は国土地理院発行の1/25,000地形図「横部・勝山」を、第8図は1/25,000地形図「久世」を複製加筆したものである。
- 3 本書に掲載した遺構・遺物実測図の縮尺率は下記により統一している。

遺 構

建物：1/80

遺 物

土器・陶磁器：1/3

目次

巻頭図版

序

例言・凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の契機と経緯	1
第2節 発掘調査の経過	2
第2章 高田城	3
第1節 地理的・歴史的環境	3
第2節 発掘調査の概要	6
第3節 遺構・遺物	9
1 検出遺構	9
2 出土遺物	10
第3章 田楽城	11
第1節 地理的・歴史的環境	11
第2節 発掘調査の概要	14
第4章 まとめ	16

図版

報告書抄録

奥付

図目次

第1章		第6図 建物 (1/80)	9
第1図 遺跡位置図	1	第7図 出土遺物 (1/3)	10
第2章 高田城		第3章 田楽城	
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	4	第8図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)	11
第3図 高田城要図 (1/15,000)	6	第9図 田楽城縄張図 (1/2,500)	14
第4図 調査区周辺地形図 (1/300)	7	第10図 調査区周辺地形図 (1/400)	15
第5図 遺構配置図 (1/80)	8		

図版目次

第2章 高田城	第3章 田楽城
巻頭図版 1 城山・太鼓山と勝山の町並み (南西上空から)	図版 2 1 遠景 (西から)
2 高田城調査区全景 (南西上空から)	2 調査区全景 (南東から)
図版 1 1 調査区全景 (北から)	3 調査区全景 (東から)
2 遺構検出状況 (南から)	
3 出土遺物	

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の契機と経緯

昭和28年2月に開始されたわが国のテレビ放送は、60年近く続いてきた地上アナログ放送から地上デジタル放送に2011（平成23）年7月をもって全面移行されることとなった。そのため全国各地においてデジタル放送中継局の建設整備が進められることとなり、この真庭市においても勝山・落合の両地域で中継局の建設整備が行われることとなった。勝山地域では太鼓山が、落合地域では中河内地内に所在する山がそれぞれ選定された。いずれも、各テレビ局のアナログ放送中継局がすでに所在している場所である。

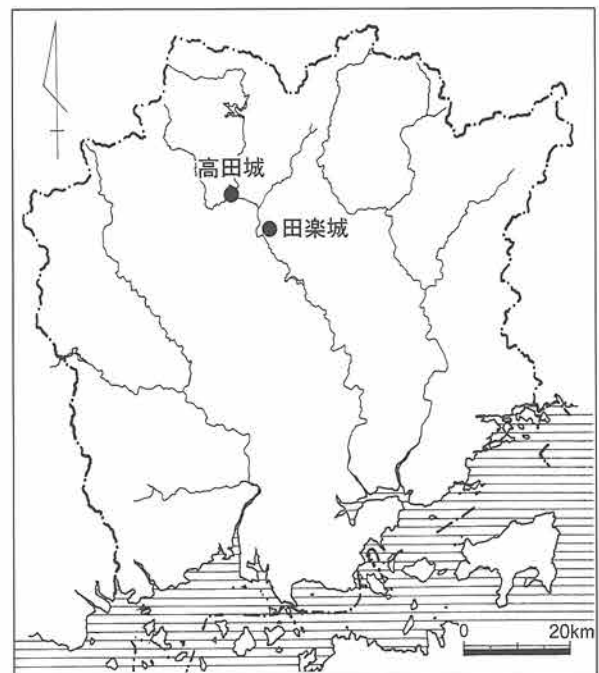
高田城

太鼓山については岡山放送株式会社が事業主体各社の幹事社として、真庭市教育委員会に対しその取扱いについて照会がなされた。計画は既設のアナログ放送中継局に隣接してデジタル放送中継局を建設し、デジタル放送への完全移行後はアナログ放送施設を解体撤去する、というものであった。太鼓山には高田城の出丸が所在し、また高田城は周知の埋蔵文化財包蔵地であると同時に真庭市指定史跡でもあることから、代替地への計画変更等により極力現状保存に努められるよう協議を重ねてきた。しかしながら、中継局の立地条件からみて他所への設置がきわめて困難であること、事業の公共性が著しく高いことなどの理由により、平成20年11月5日付けで埋蔵文化財発掘届出が提出され、記録保存のため発掘調査を実施することとなった。

岡山放送株式会社と調査の実施方法等について協議をした結果、「埋蔵文化財発掘調査に関する覚書」を平成21年1月13日付けで締結し、発掘調査を実施することとなった。なお、埋蔵文化財発掘調査の報告を平成21年1月29日付け、真教生第297号で岡山県教育委員会に提出している。

田楽城

田楽城については山陽放送株式会社が事業主体各社の幹事社として、真庭市教育委員会に対しその取扱いについて照会がなされた。計画は勝山地域のものと同様、既設のアナログ放送中継局に隣接してデジタル放送中継局を建設し、デジタル放送への完全移行後はアナログ放送施設を解体撤去する、というものであった。高田城と同様、代替地への計画変更等により極力現状保存に努められるよう協議を重ねたが、計画変更は事実上不可能であり、施設の建設面積を必要最小限に抑える等、遺跡の破壊、遺跡におよぼす影響を極力抑える努



第1図 遺跡位置図

力をする事とし、記録保存のため事前発掘調査を実施することで合意をした。

平成21年1月27日付けで埋蔵文化財発掘届出が提出され、山陽放送株式会社と「埋蔵文化財発掘調査に関する覚書」を平成21年3月5日付けで締結し、発掘調査を実施することとなった。なお、埋蔵文化財発掘調査の報告を平成21年3月25日付け、真教生第350号で岡山県教育委員会に提出している。

第2節 発掘調査の経過

調査は、両遺跡ともに放送施設の建設により遺跡が消滅する範囲の状況についての確認、記録保存を目的として実施した。調査期間は、高田城が平成21年1月19日から2月9日、田楽城が平成21年3月23日から同月26日であり、調査面積は高田城が127.3㎡、田楽城が69.2㎡である。調査は表土除去、掘下げ、遺構の精査等をすべて人力で実施し、必要に応じて測図、写真撮影等を実施した。また、高田城についてはラジコンヘリを使用しての航空撮影を実施している。

報告書作成については平成21年度事業として、事業主体者からの依頼を真庭市教育委員会が受託して実施した。

(調査の体制)

調査主体者	真庭市教育委員会
事務局	真庭市教育委員会
	教育長 大倉 貢
	教育次長 大植昭一
	生涯学習課長 山崎藤郷
	参事 池上 博
調査担当者	主査 坂田 崇
作業員	(高田城)
	磯田幸作、上田利興、黒木敬太郎、古南一夫、清水浩之、杉原俊吉、永井玄一、西本 栄、堀井清史、山本草平 (50音順)
	(田楽城)
	片川八重子、米神徳二、柴田志朗、竹本秀雄、中塚澄男、中塚千世 (50音順)

第2章 高田城

第1節 地理的・歴史的環境

高田城は岡山県真庭市勝山地内に所在し、「勝山城」とも呼ばれる。

勝山地域は真庭市の概ね中央に位置し、旧美作国の西端、旧真嶋・大庭両郡のほぼ中央部に相当する。岡山県の三大河川のひとつである旭川とその支流である新庄川と月田川によって形成された狭小な低地部以外の85%は山地で占められている。

旧石器・縄文時代

勝山地域において、現在までのところ旧石器時代に相当する遺跡・遺物は確認されていない。

縄文時代に入ると、前期では刺突文土器が旦地区で出土しているほか、後期の磨消文土器が県立勝山高等学校の校地内で出土している。

弥生・古墳時代

当地方において弥生時代前期の遺跡は僅少であるが、岡遺跡で木葉文の壺型土器が出土している。中期以降になると陣山遺跡、太鼓山遺跡、打角遺跡、江川遺跡、椎の木遺跡、正吉遺跡、原美尾遺跡、石原遺跡で遺物が出土している。終末期では丹塗りの壺や高杯といった祭祀用遺物を出土している月田堀の内北遺跡がある。

勝山地域において古墳は少なく、15基を数える程度である。最古の古墳は古呂々尾中にある中尾神社古墳であり、径15m、高さ1.5mほどである。原美尾池遺跡からは5世紀末の須恵器が出土している。

古代

日本書紀の欽明天皇16(555)年、吉備5郡に白猪屯倉が置かれたとあり、大庭郡の一部が比定されている。和銅6(713)年、備前国のうち英田・勝田・苫田・久米・大庭・真嶋の6郡が割かれて美作国となった。勝山地域は真嶋郡高田郷・月田郷・井原郷と大庭郡の一部の範囲である。奈良時代の遺物としては、柴原地区で骨蔵器が出土している。

中世以降

鎌倉時代には梶原景時が美作国の守護になり、その失脚後は和田義盛に代わっている。承久3(1221)年に起こった承久の変で敗北した後鳥羽上皇が隠岐の島に配流される際に、大庭・真嶋を通ったといわれ、様々な伝説として残されている。承久の変の後、公家や上皇方の武士たちの所領に新補地頭として御家人が派遣されるようになり、美作においても高田荘には三浦氏が、英田河合荘には渋谷氏等が派遣された、と考えられている。

三浦氏と高田城

三浦氏は現在の神奈川県三浦半島を本貫地とする、鎌倉幕府でも最有力の御家人であった。しかし北条氏による専制推進の中で次第にその存在を疎まれるようになり、宝治3(1249)年、三浦義村らは北条時頼に滅ぼされてしまう。三浦一族のうち生きのびた佐原氏が、のちに三浦を名乗るようになったとされている。建武2(1335)年、後醍醐天皇や新田義貞と対立した足利尊氏が九州で力を蓄えて瀬戸内海を東上する途中、三浦介(三浦高継)に美作の新田勢を征伐するよう命じた記録が、御教書



- | | | | |
|----------|------------|------------|--------------|
| 1 高田城 | 7 正吉遺跡 | 13 小山古墳 | 18 谷山古墳 |
| 2 城山窯跡群 | 8 岡遺跡 | 14 陣山砦跡 | 19 上江川 1～5号墳 |
| 3 化生寺東遺跡 | 9 椎の木1～3号墳 | 15 陣山遺跡 | 20 上江川遺跡 |
| 4 勝山高校遺跡 | 10 岡椎の木遺跡 | 16 かぶら山 | 21 寿和1～5号墳 |
| 5 畷田第2遺跡 | 11 舟津屋敷 | 17 高応神社東遺跡 | 22 宝泉寺跡 |
| 6 畷田第1遺跡 | 12 組遺跡 | | |

第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

として残されている。

高田城は、高田荘の地頭として関東から来た三浦下野守貞宗の築城とされている。築城の年代については、延文5（正平15、1360）年、応安2（正平24、1369）年、永徳3（弘和3、1383）年、嘉慶2（元中5、1388）年と、残されている系図により諸説があるが、延文～嘉慶年間の築城と一般的に認識されている。

貞宗以後は、行連－範連－政盛－持理－貞明－貞連－貞国と続くとされるが、貞連以前の城主についてはほとんど記録がなく、不明な点が多い。文亀年間（1501～1504）、貞連は美作守護赤松氏の拠点である篠葺（篠向）城を攻めていることなど、このころの三浦氏は高田城を拠点にする、作西地方における領国支配者的性格を有していたと思われる。天文元（1532）年、出雲の尼子経久が美作へ侵略しはじめ、高田城も数度にわたる攻撃によりその度に落城と復興を繰り返した。その間、貞久－貞勝－貞盛と城主が交替していくなか、永禄8（1565）年、尼子氏にかわって台頭した毛利氏についた備中松山城主三村家親により高田城は落城、城主貞勝は自害するが、翌永禄9年には三浦貞盛が高田城を奪還し、貞広が城主となる。その後三村氏の勢力は衰え、毛利氏により滅ぼされることになる。永禄12（1569）年、貞広が尼子氏についたため毛利氏に攻められ落城するが、山中鹿之助の支援を受け元亀元（1570）年に復城した。その後毛利氏の侵攻を受け、天正3（1575）年、宇喜多直家による和議の勧めにより高田城を開城、城主には月田城主榑崎元兼が入った。

それから美作の地は毛利氏と宇喜多氏の争いの舞台となるが、天正12（1584）年から宇喜多氏の美作領有は関ヶ原の戦いまで続くこととなった。高田城には三浦氏の旧家臣である牧氏が入った。慶長5（1600）年、関ヶ原の戦いで宇喜多秀家は石田三成方につき敗北し、美作は小早川秀秋により領有されることとなった。その秀秋の病死後、慶長8（1603）年に森忠政が入部することとなり、高田城には各務氏、大塚氏といった重臣が城番に入った。元禄10（1697）年、森氏の改易に伴い城下は幕府直轄となり幕府代官の所管となった。明和元（1764）年、三河西尾藩主であった三浦明次が当地に転じ、高田城跡に築城、真嶋・大庭両郡の一部を勝山藩2万3千石として領することとなった。明次は高田の地名を勝山に改め、勝山城の西麓に屋形を構え、以後三浦氏による統治が明治維新まで続くこととなった。

高田城に関連した既往の発掘調査としては、三の丸遺跡¹⁾で実施している。調査の結果、室町時代前期～江戸時代初期にわたる建物等の遺構や輸入陶磁器等の遺物を出土しており、三浦氏またはその家臣の館、城番の館跡の一部であると推定されている。

註

1) 橋本惣司他『高田城三の丸遺跡』 勝山町教育委員会 2005

参考文献

森本清丸編『勝山町史』前編 勝山町 1974

葛原克人他「高田城」『日本城郭大系』13 新人物往来社 1980

森 俊弘「美作西部における戦国期の経緯について」『久世町埋蔵文化財発掘調査報告』3 久世町教育委員会 1999

第2節 発掘調査の概要

高田城は旭川と新庄川との合流点を南方に望む、南北に連なり勝山市街地の背後にそびえる城山および勝山（太鼓山）に築かれた中・近世城郭である。城山は如意山とも称され、標高 320 m を測る。勝山は標高 261 m で、明和元(1764)年に三浦明次が入府してから「太鼓山」と呼称されるようになった。

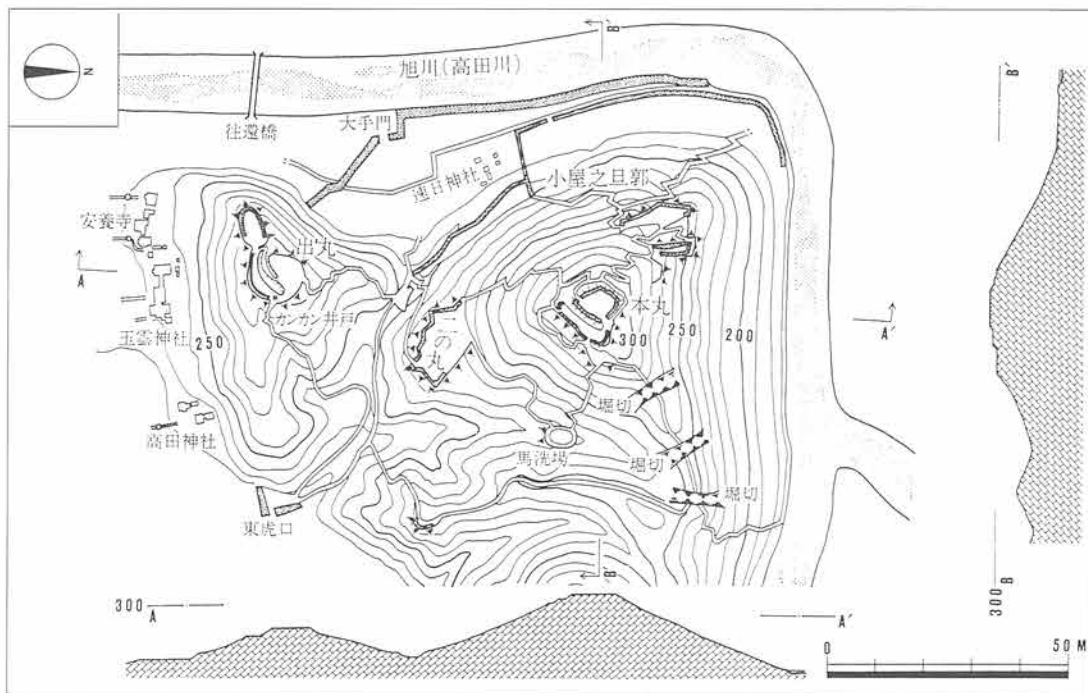
高田城はその詳細について未だ不明な点も多いが、概ね本丸・二の丸・出丸により主要部を構成し、その他の施設として馬洗場やいくつかの堀切等がある（第3図）。二の丸はかつて造成工事がおこなわれ、現在はその大部分をグラウンドに姿を変えてしまっている。なお、出丸の付近にはカンカン井戸と呼ばれる井戸が現存している。



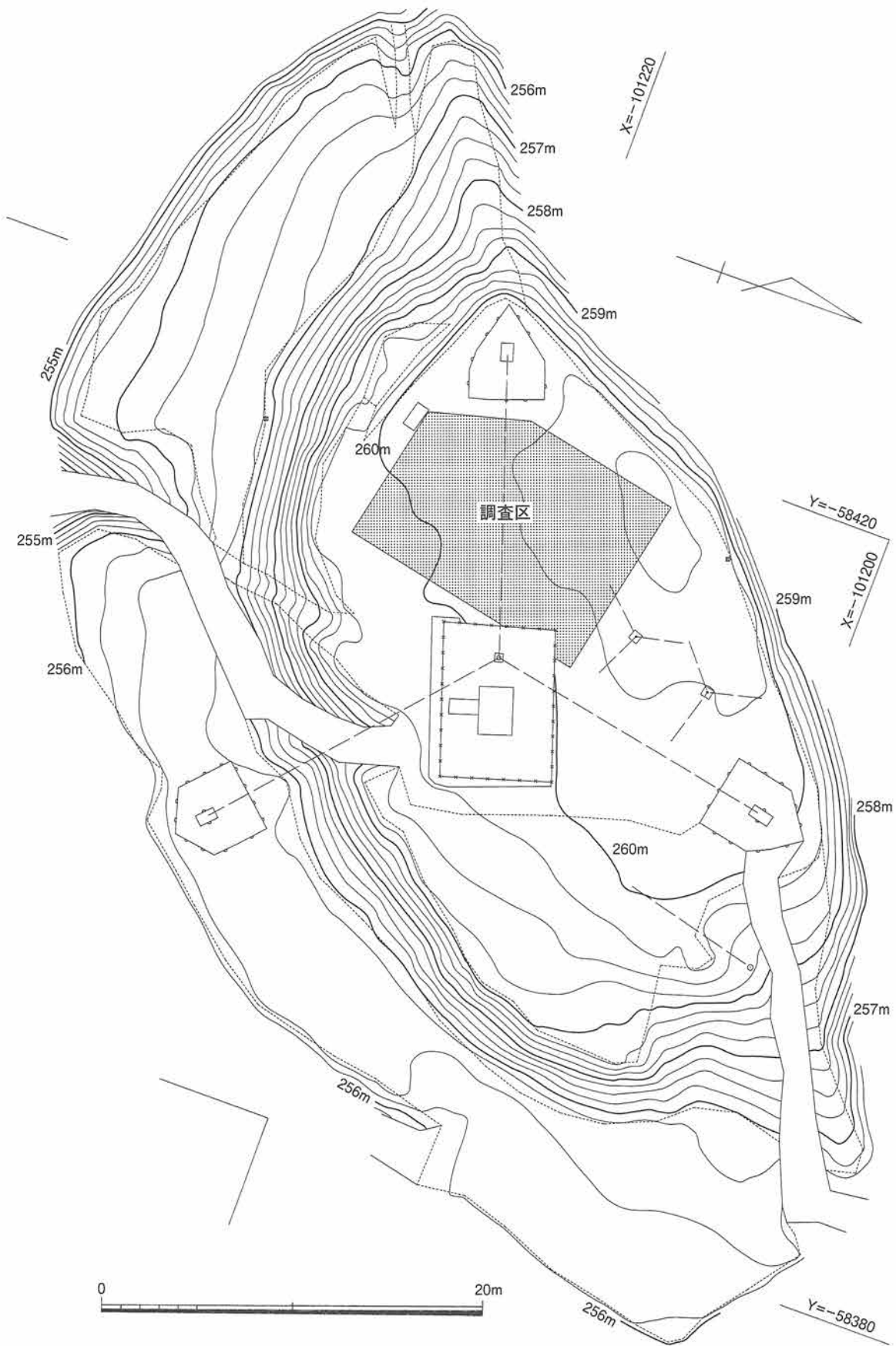
調査風景

今回発掘調査の対象となったのは、出丸が所在する太鼓山の頂上部である。出丸には現行のテレビ局のアナログ中継施設がすでに存在しており、それに隣接してデジタル中継施設が建設される部分について実施した。

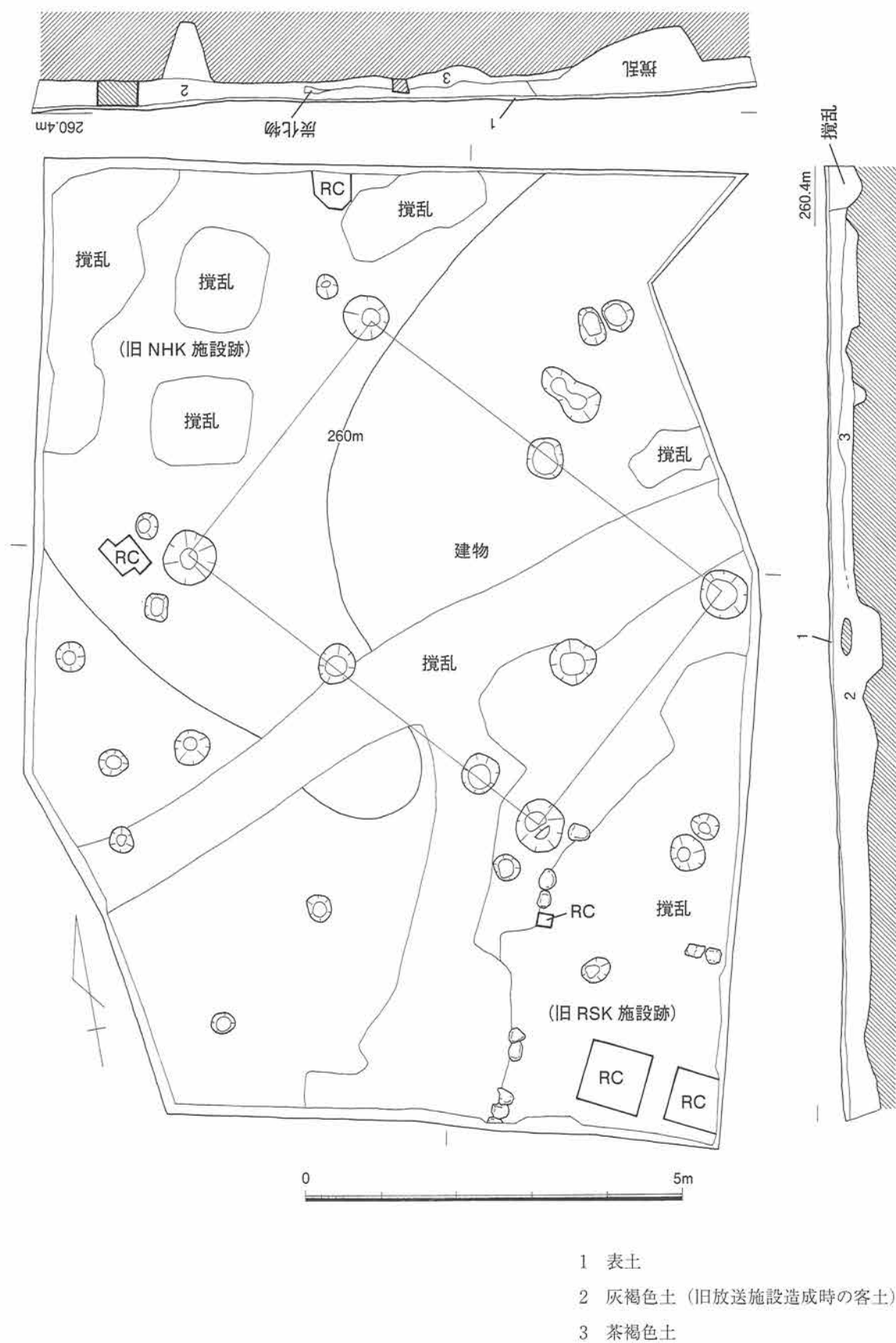
発掘調査に先立ち、調査区周辺の詳細な地形測量をおこなっている（第4図）。出丸の主郭以外に明瞭な平坦面を確認することはできていないが、調査区の南～東側にかけて、概ね標高 256～257 m の範囲で比較的なだらかな面となっている。現行中継施設のための管理道等で出丸周辺は比較的開削されており、遺構として



第3図 高田城要図 (1/15,000) (『日本城郭体系』13より転載)



第4図 調査区周辺地形図 (1/300)



第5図 遺構配置図 (1/80)

の平坦面であるか、後世の造成による削平であるかは定かではない。なお、北側については急峻な斜面となっている。

発掘調査は、調査区に十字方向の土層観察用土手を設定し、順次掘り下げて進行していった。掘削はすべて人力によりおこなっている。層序的には、表土直下で既設の中継施設建設時のものとみられる、押し均された土砂の堆積となり、その下で基層に達している。調査区内には多くの攪乱が認められた（第5図）。その要因としては現行の中継施設に先立ち、昭和30～40年代に建設・運営されてきた旧中継施設の痕跡や、アース線を埋設するために掘られた溝といったものである。

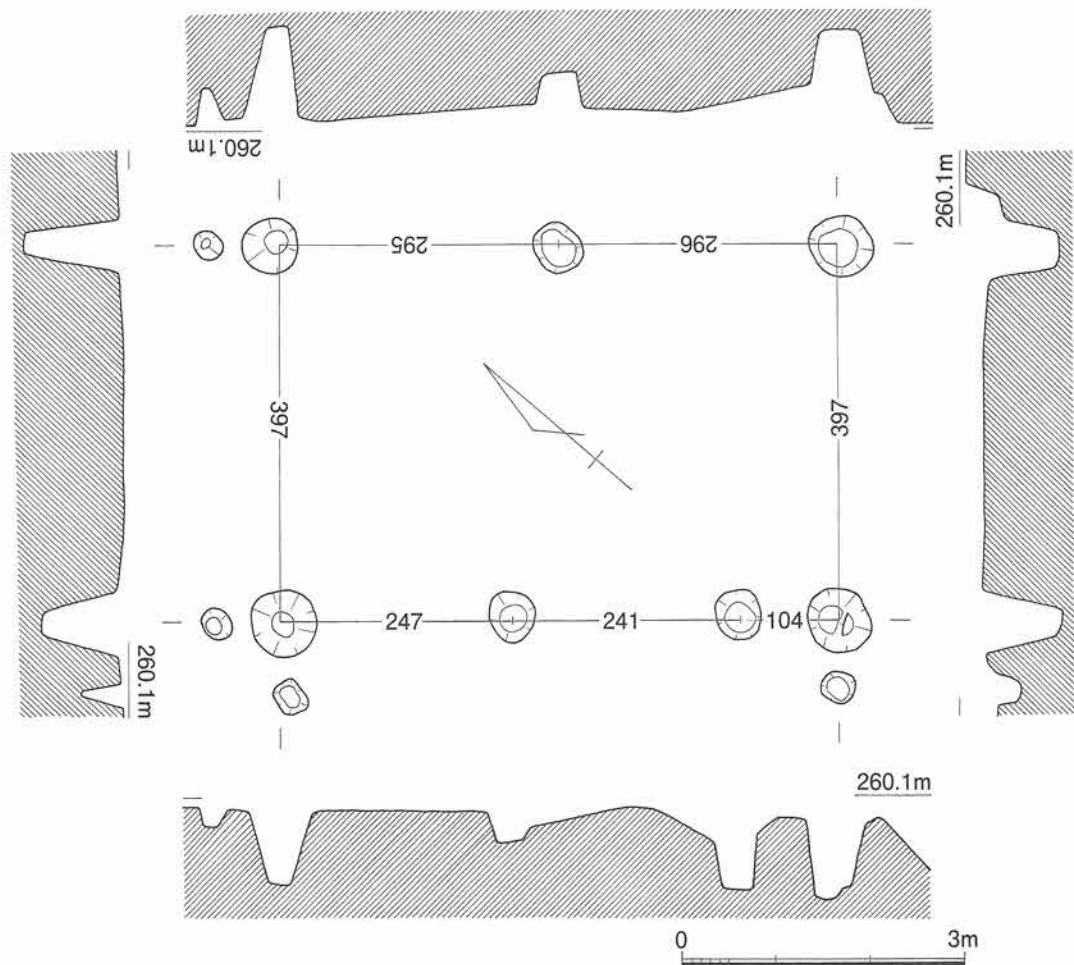
調査の結果、遺構としては1棟の建物と13本の柱穴を検出し、遺物として若干の陶磁器類を出土している。

第3節 遺構・遺物

1 検出遺構

建物（第5・6図）

調査区内のほぼ中央で検出している。棟方向は北西-南東で、真北に対して西偏40°である。規模



第6図 建物 (1/80)

は2間×1間(592cm×397cm)を測る。柱穴は直径50～70cm、検出面からの深さは30～100cmである。7本の柱穴から成るが、東辺は3本、西辺は4本と非対称である。また東辺の3本は等間隔に並んでいるが、西辺の4本については、南端の柱穴に狭い間隔で1本が設けられ、そこから北に向かってほぼ等間隔に3本が並ぶ、という配置となっている。北辺および西辺には支柱とみられる小柱穴を柱穴に伴う形で検出している。なお、この建物に伴う遺物は出土していない。

2 出土遺物

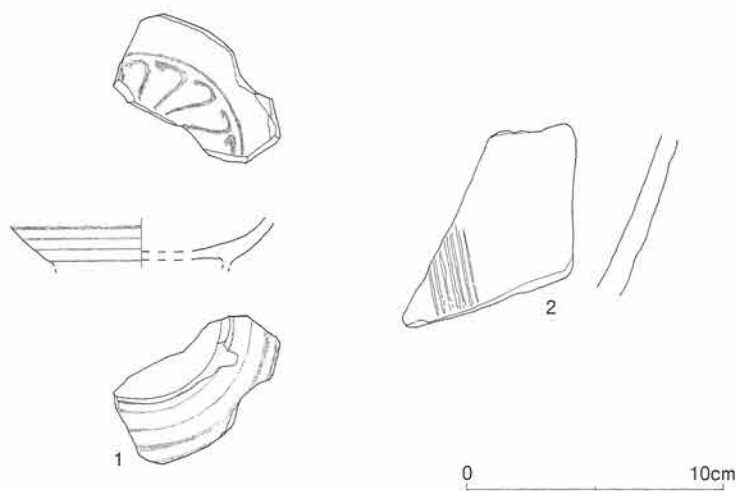
陶磁器類(第7図、図版1)

今回の調査で出土した遺物はごく少量にとどまっており、また攪乱中からの出土とけっして良好な資料とはいえないものである。

1は磁器の皿である。残存状況は底部付近の一部で、高台も欠損して失われており、底面の高台内側で推定直径6.2cmを測る。染め付けについては、内面の見込みに1条の線が巡らされ、その内区に唐草状の模様が放射状に施されている。外表には現存で4条の横方向に巡る線が確認できる。胎土は

精良で、色調は灰白色を呈する。染め付けが明代の特徴を示していることから、福建省漳州窯の産と推定される。時期については16世紀末～17世紀初頭とみられる。

2は瓦質土器の播鉢である。外面は指押さえ後ナデにより調整し、内面には7条の播目がみられる。胎土は精良で色調は黄白色を呈する。焼成はあまく、器質はやや脆弱である。16世紀後半～17世紀前半の所産とみられる。



第7図 出土遺物(1/3)

第3章 田楽城

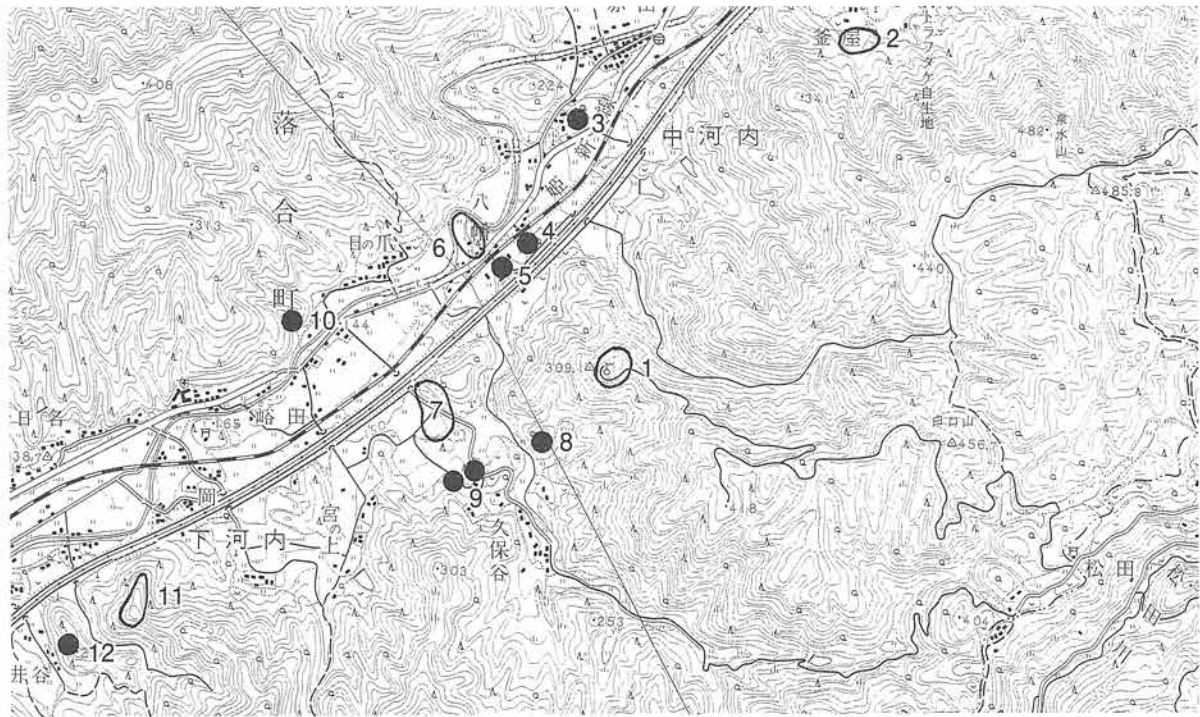
第1節 地理的・歴史的環境

落合地域は真庭市の南東部に相当し、田楽城が所在する中河内地区は落合地域の北東部に位置する。落合地域の中心部は、旭川とその支流である備中川や河内川等の中小河川が流入して形成された沖積低地上にある。北側は中国山地の南辺にあたる標高400～600mの山々に、南側は吉備準平原の標高300～500mの山々に取り囲まれた小盆地地形である。

旧石器・縄文時代

落合地域では明確な旧石器時代の遺跡については現在までのところ知られていないが、旧石器とみられる遺物はこれまでも若干見つかっている¹⁾。

縄文時代になると、高屋遺跡で草創期の尖頭器²⁾が、赤野遺跡³⁾や西原遺跡⁴⁾で早期の押型文土器が出土している。前・中期の遺跡は少なく、前期は古市場遺跡⁵⁾、中期は西原遺跡で確認されている。



- | | | | |
|--------|-----------|------------|----------|
| 1 田楽城 | 4 野田塚古墳 | 7 近実遺跡 | 10 日ノ爪古墳 |
| 2 釜谷遺跡 | 5 藤こそ1号墳 | 8 狐塚古墳 | 11 高山城 |
| 3 布札遺跡 | 6 八幡1～3号墳 | 9 久保谷1・2号墳 | 12 舟尾山古墳 |

第8図 周辺遺跡分布図(1/25,000)

後・晩期になると再び遺跡数が増加し、須の内遺跡⁶⁾、古市場遺跡、宮の前遺跡⁷⁾、西原遺跡等がある。

弥生・古墳時代

弥生時代については前期から中期前半にかけての遺跡は少なく、遺跡数が増加するのは中期末から後期にかけてである。この頃になると、旭川の支流によって形成された沖積地を生活の基盤とする地点にみられ、宮の前遺跡、古市場遺跡、須の内遺跡、郡遺跡⁸⁾等がある。中山遺跡⁹⁾では、特殊器台・特殊壺を伴う終末期の墳墓群が検出されている。

古墳時代になると集落遺跡の確認例は弥生時代に比して極端に少なく、落合地域で7遺跡程度である。須の内遺跡や古市場遺跡などあるが、宮の前遺跡で前期の円形・方形の周溝墓が8基検出されていることから、付近に当該期の集落跡が存在する可能性は十分に想定される。

集落遺跡が少数であることに対し、古墳は多数存在する。落合地域で200基あまりの古墳が確認されており、その内前方後円墳は8基を数える。前方後円墳で代表的なものは県指定史跡でもある川東車塚古墳¹⁰⁾である。

奈良時代以降

奈良時代以降の遺跡としては、宮の前遺跡、古市場遺跡、須の内遺跡、郡遺跡等がある。宮の前遺跡周辺の地名には条里制の名残をとどめる「九反ヶ坪」の地名がみられる。落合地域には現在までのところ古代寺院に比定できる明確な遺跡はないが、下一色2号墳¹¹⁾からは蓮華文の瓦当を有する土師質陶棺が出土しており、坂元地区では宝珠様の骨蔵器¹²⁾が出土していることなど、いくつかの仏教伝来を示す資料は知られている。

田楽城と河内川流域の中世城郭¹³⁾

田楽城は中河内字鍋ヶ峪529番地先に所在する。旧上河内下村と下河内村の境になり、河内川からの比高差は100mほどである。中河内半坂谷と下河内の久保谷に挟まれた山並みにあり、遠くには岩屋城跡(岡山県指定史跡、津山市中北上)や高仙城を、真正面には篠向城¹⁴⁾・大寺畑城を遠望することができ、落合地域の市街地域である西原・落合垂水・下方の各地域までを一望できる。

田楽城に関する文献的な記録としては、『作陽誌』に「田楽堡 上河内下村に在り。宇喜多中納言の臣牧藤左衛門家信此に居る。」と記され、『真庭郡誌』には「田楽堡(一名田永城) 河内村大字上河内に在り、宇喜多中納言の臣牧藤左衛門家信此に居る、家信は牧兵庫の舎弟にして直家の妹を娶り、且つ諱字を頂き國信を家信と改めたり、宇喜多の滅後全郡湯本村に隠蟄す、森公入国の初め出而之に見へ、大蔵如真と共に嚮導となりて封内を巡れり。」と記されている。

河内川流域には田楽城の他、旭川と河内川の合流点付近から上流方向にかけて順に、逆巻城、土器尾城、赤野遺跡、高山城、地家(持家)城と所在している。以下、順にそれらの概略について述べる。
逆巻城 法界寺字坂巻と赤野字古城山の両地区にまたがり、旭川の逆巻淵の峻険な崖の上、標高186mの地点に位置する。4段に整地され、長さ約60m、幅約10mと狭隘で、位置的にも主峰「一の丸」にある土器尾城の砦・出城である可能性も考えられる。年代的には土器尾城と同時期で、宇喜多家家臣の牧藤左衛門の居城であったといわれている。

垂水神社の所蔵文書に、「永禄年間逆巻城主東郷若狭守源義邦の願主(以下略)」という記録のあることから、東郷若狭守が居城した、という説もある。

土器尾城 下見・法界寺・赤野・下河内の各地区の接する、中の谷山の頂上に位置する。法界寺地区では古くから「一の丸」と呼称され、赤野地区では「要害」と呼びならわされてきた。本丸(一の丸)

は石垣を有さないが3段に整地され、南北が60m、東西が15mの規模を測り、長楕円形を呈する。また、一の丸から北西約150mの地点にも郭が認められる。築城年代は不詳であるが、逆巻城と同じく牧藤左衛門の居城であったと伝えられる。関ヶ原の合戦で宇喜多家の滅亡と同じくして廃城となったと考えられている。

赤野遺跡 赤野集落の対岸の丘陵上に位置する。縄文～古墳時代の遺構・遺物が出土しているが、中世の屋形遺構と遺物を主とする遺跡である。荘官の居館か、土器尾城または高山城の城主の居館であったとみられる。

高山城 下河内地区に所在する。『美作國古城跡』大庭郡の項に、「一、高山城 岩佐勘解由 下河内村」との記述がある。祥雲寺裏山にある秋葉様を祀る丘から谷を挟み東側の小高い丘からはじまっている。大きな楕円形の曲輪と細長い腰曲輪とで構成され、「寝小屋（根小屋）」ともいわれる山城麓の館城を想起させる。地元の伝承では摩利支天を祭祀していたとみられる。引き続き60mほど登ったところで、細長い尾根上に築かれた7基ほどの小曲輪が確認でき、さらに登ると主郭に至る。

地家（持家）城 上河内地区に所在する。南・北側はともに急斜面であり、東側は比較的緩斜面となっている。頂上は4,910㎡の面積であり、2段に築かれ、南北に7本あまりの堅堀と3本あまりの横堀が遺構として残存している。延文3・正平13（1358）年、三浦貞宗が高田荘の如意山城（高田城）に拠り、その弟良宗が上河内地区を本拠地とし、地家城を築いて高田城との連携を図っていたと考えられる。

註

- 1) 橋本惣司「狩猟と採集の時代」『落合町史 通史編』落合町 2004
- 2) 落合町教育委員会編『落合町の文化財』1987
- 3) 山磨康平・岡田 博他「赤野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』3 岡山県教育委員会 1973
- 4) 栗野克己他「西原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』6 岡山県教育委員会 1973
- 5) 切明友子他「郡遺跡・須の内遺跡・古市場遺跡」『落合町埋蔵文化財発掘調査報告』4 落合町教育委員会 2004
- 6) 浅倉秀昭他「須内遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』11 岡山県教育委員会 1976
- 7) 二宮治夫・浅倉秀昭他「宮の前遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12 岡山県教育委員会 1976
- 8) 註5に同じ。
- 9) 山磨康平他『中山遺跡』落合町教育委員会 1978
- 10) 倉林真砂斗他「川東車塚古墳の研究」『美作地方における前方後円墳秩序の構造的研究』II 吉備人出版 2004
- 11・12) 註2と同じ。
- 13) 河内地区の中世城郭に関する記述は、下記の文献を参考とし準拠している。
「第六章 河内地区 第十四節 遺跡」『落合町史 地区誌編』落合町 1999
難波澄夫・橋本惣司「山城と館」『落合町史 通史編』落合町 2004
- 14) 池上 博・森 俊弘『篠向城跡』NTTドコモ中国受信施設建設埋蔵文化財調査委員会 2007
新谷俊典他『篠向城』久世デジタル中継局建設事業埋蔵文化財調査委員会 2008

第2節 発掘調査の概要

田楽城は河内川を南東から望む流れ尾根の突端部に位置しており、標高は最高所で約320mである。旭川と河内川の合流点からは北東方向へ約3.5kmのところになる。頂上部に既設のテレビ中継施設が存在することから、その管理用道路が麓から主郭に至るまで設置されている。また、周辺の多くが植林であることから、麓から中腹にかけて多くの林業用作業道が開削により設置されている。

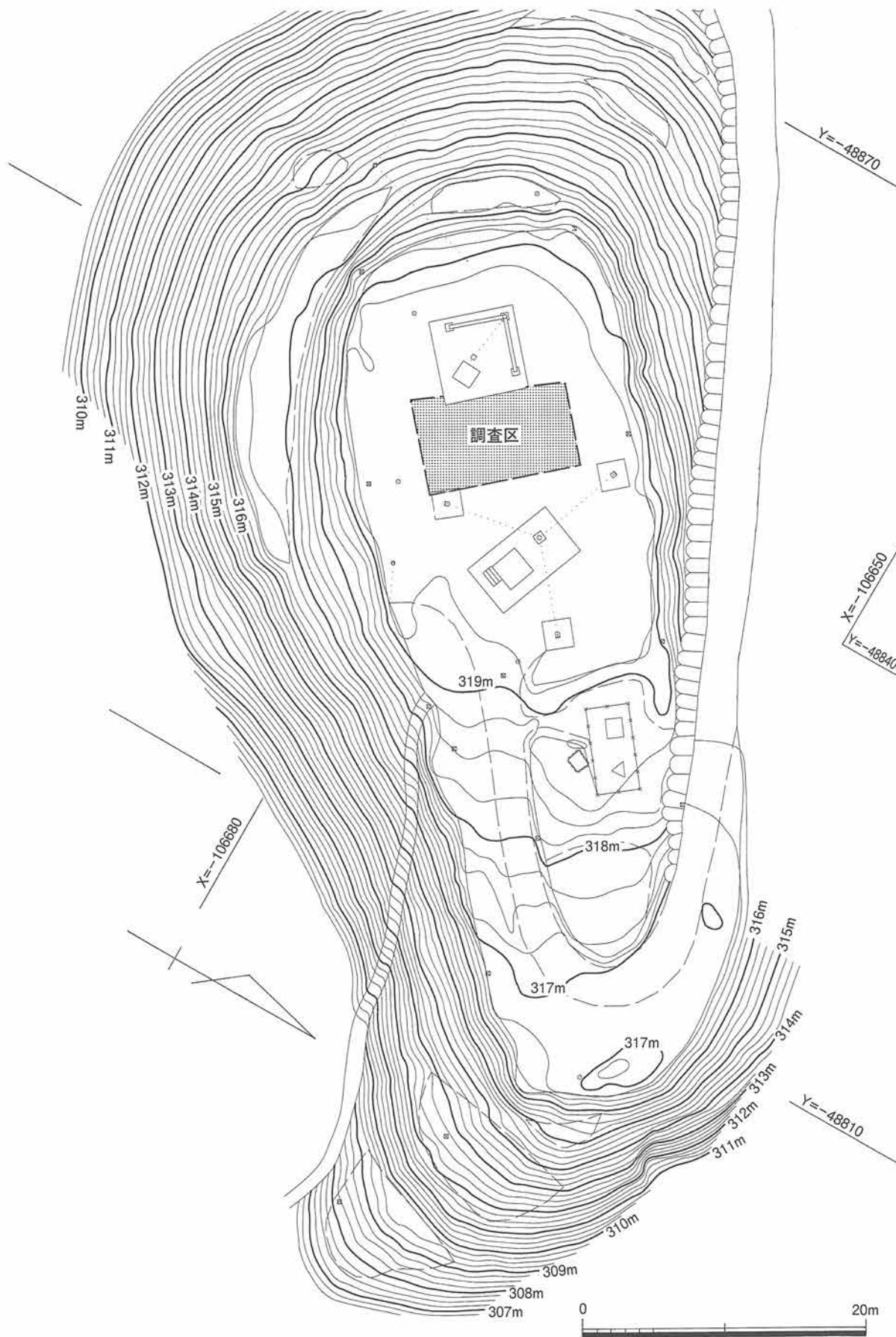
発掘調査に先立ち、主郭を中心とする調査区周辺の詳細な地形測量を実施した(第10図)。その結果、主郭より西側下方で3ヶ所、南側に1ヶ所の平坦面を確認している。また、東側についても進入路を挟んで大小3ヶ所の平坦面を確認している。

発掘調査は新たにデジタル中継局が建設される箇所を対象に実施することとなった。調査区の規模は南北方向で約11m、東西方向で約6～7mであり、面積は69.2㎡である。発掘作業は終始人力のみによりおこなった。

調査の結果、表土直下にて基層に達したが、遺構については柱穴等全く確認できておらず、また遺物についても一切出土を見ていない。調査範囲が偶然、遺構・遺物の存在しない場所である可能性も考えられるが、主郭平坦面の周囲に低い土塁状の高まりが認められることから、既設のテレビ中継施設を建設する折、主郭部を重機等により削平し造成したためによるものと捉えることもできる。



第9図 田楽城縄張図(1/2,500)(難波澄夫氏作図、『落合町史 地区史編』より転載)



第10図 調査区周辺地形図(1/400)

第4章 まとめ

今回の調査で得られた若干の所見について、以下に述べる。

高田城について

今回、高田城で発掘調査の対象となったのは、出丸の主郭に相当する平坦面である。出丸は太鼓山の頂上部に築かれており、その名が示すように江戸期には勝山藩によって太鼓櫓が設けられていた場所でもある。まず、今回検出した遺構のうち、建物が太鼓櫓に相当するかどうか、という問題について検討したい。

太鼓櫓については、『美作国勝山城』に絵図とともに「出丸 柵矢来長九拾三間・太鼓櫓壱ヶ所九尺四方」という記述が残されている¹⁾。九尺四方ということであれば、今回検出した建物とは規模的にあわないことになる。『真鳥県庁および旧勝山城絵図』（岡山県立記録資料館蔵）²⁾に描かれている太鼓櫓の位置が正確に反映されたものであると仮定すれば今回検出した建物とは位置が違い、また太鼓櫓が礎石によるものであったとすれば、この建物遺構を太鼓櫓に比定することはできなくなる。

次に検出した遺構の時期について検討したい。この出丸主郭平坦面は第2章第2節でも述べたとおり、既設の中継施設に伴う削平・攪乱が著しく、遺構の検出についても全て基層面での確認とならざるを得なかった。そのため、層位的に遺構の時期差を把握することは不可能であった。

建物は2間×1間規模の掘立柱によるものである。特徴として、柱間が247～397cmと比較的広いことがあげられる。このことは、仮に束柱が間に入ることを考慮しても長いものであるとみることができ、比較的古い様相を示す特徴である。天正期に入ると、建物の柱穴間が約2m前後になることから建立に際して専門工人の関与が指摘されているが、今回検出した建物はそれよりも古いものになる可能性が考えられる。

出土遺物については、磁器の皿と瓦質土器の播鉢が破片ではあるが各1点出土している。攪乱中からの出土であり遺構に伴うものではないため資料的には価値に欠けるが、磁器が16世紀末～17世紀初頭、播鉢が16世紀後半～17世紀前半のものとみられ、今回検出した建物等が営まれた時期よりも少し下るものになると考えられる。

田楽城について

今回の調査では柱穴等の遺構が検出されず、また遺物についても一切出土していないことから、考古学的に田楽城の営まれた年代等を考察する資料を得ることはできていない。しかしながら今回、主郭部を中心とする詳細な地形測量を実施し、発掘調査は行っていないため実態は不詳であるがいくつかの平坦面と思われる痕跡を新たに確認する等、田楽城に関する資料蓄積の進展をみることができた。今後、当地域の中近世城郭研究のうえで、今回の調査成果の活用が期待される次第である。

註

1) 森本清丸編『勝山町史』前編 勝山町 1974

2) 横山 定「去りゆく藩主たち」『図説 新見・高梁・真庭の歴史』郷土出版社 2008

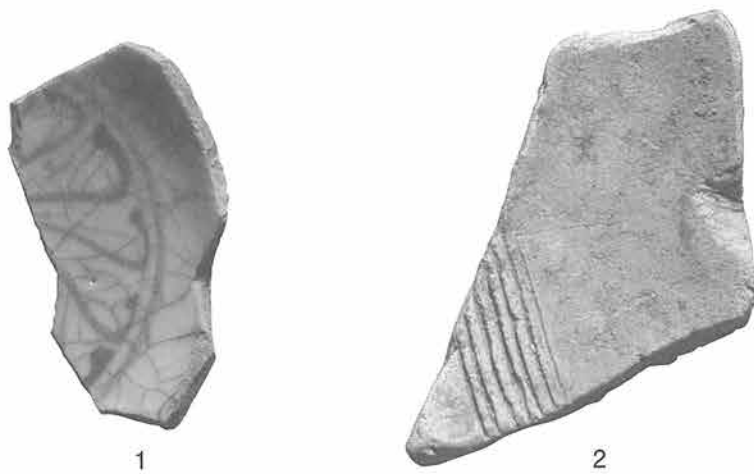
1 調査区全景
(北から)



2 遺構検出状況
(南から)



3 出土遺物





1 遠景
(西から)



2 調査区全景
(南東から)



3 調査区全景
(東から)



1 城山・太鼓山と勝山の町並み（南西上空から）



2 高田城調査区全景（南西上空から）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	たかたじょう でんがくじょう							
書 名	高 田 城	田 楽 城						
副 書 名	地上デジタルテレビ放送施設建設工事に伴う発掘調査							
巻 次	一							
シ リ ー ズ 名	真庭市埋蔵文化財調査報告							
シ リ ー ズ 番 号	3							
編 著 者 名	坂田 崇							
編 集 ・ 発 行 機 関	真庭市教育委員会							
所 在 地	〒719-3194 岡山県真庭市落合垂水1901番地5 TEL 0867-52-3730							
発 行 年 月 日	2010(平成22)年1月31日							
所収遺跡名	所在地 岡山県真庭市	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高田城	勝山 1-19(ほか)	33214	旧勝山町63	35°	133°	20090119	127.3 m ²	地上デジタル テレビ放送施 設建設
				08′	69′	~		
田楽城	中河内 552-2(ほか)	33214	旧落合町300	59″	31″	20090209	69.2 m ²	地上デジタル テレビ放送施 設建設
				35°	133°	20090323		
				03′	79′	~		
				72″	83″	20090326		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高田城	城跡	中・近世	建物 柱穴		陶磁器		出丸の一部を調査	
田楽城	城跡	中世	(検出なし)		(出土なし)			

真庭市埋蔵文化財調査報告3

高田城 田楽城

地上デジタルテレビ放送施設
建設工事に伴う発掘調査

平成 22 年1月 28 日 印刷
平成 22 年1月 31 日 発行

編集・発行 真庭市教育委員会
岡山県真庭市落合垂水 1901-5

印 刷 有限会社 勝山印刷

